

中河与一文芸賞（作文）

ぼくとひいじいちゃんと弟と

坂出市立林田小学校 三年

山 上 維 心

ぼくは、生まれたときからずっとひいじいちゃんといっしょに過ごしてきた。ぼくが小さいときから、ひいじいちゃんの大好きな時代げきを毎日いっしょに見ていた。ぼくはまだカタコトのおしゃべりしかできなかったけれど、決めゼリフの「セイバイ」をよくまねしていたらしい。

ぼくが三さいのときに、世の中がウイルスでいっぱいになってしまった。外出もできなくなって、行動にもせいげんがかかってしまった。今までできていたこともできなくなつて、とても不自由だったのを覚えている。もちろん、ひいじいちゃんはお年よりだから、家の中で過ごすばかりになってしまった。さん歩に行くこともできなくなつてしまった。けれど、大好きな時代げきが、ぼくとひいじいちゃんの楽しみになった。毎日毎日見ていたから、時代げきが終わったあとにかかる北島三ろうの曲も覚えた。おかげで、他にもえん歌をたくさん覚えることができた。

えん歌を覚えては、ひいじいちゃんの前で歌うたび、ひいじいちゃんはニコニコとよろこんで聞いてくれた。ちなみに、今でもぼくは、石川さゆりの「つがる海きよう冬げしき」が大好きである。

ウイルスのせいげんが少しかいじよされて、ぼくはひいじいちゃんとさん歩にも行くことができるようになった。ぼくはあい用の三りん車で、ひいじいちゃんはつえをついて、家のまわりをさん歩した。ときどき三りん車の台にボールをつみこんで、近くの広場でいっしょに遊んだりもした。

ぼくが五さいのときには、はじめてしようじょうを見せた。お姉ちゃんやお兄ちゃんは、ひいじいちゃんにしようじょうを見せたことがあつたけれど、ぼくがしようじょうを見せるのがはじめてだったものだから、「グーグー」と言つて「次もがんばれよ」と言つて、とてもよろこんでくれた。

だけど、ぼくが六さいのとき、ひいじいちゃんは天国に行つてしまった。ちょっと前からしんどいとは言つていたけれど、おわかれするなんて思つてもいなかった。夜中にびよういんから帰つてきたひいじいちゃんは、ぼくが知っているひいじいちゃんではなかった。ぼくが歌を歌つても、おもしろいことをしても、しようじょうを見せて

も、もう何も言ってくれなかった。とてもとてもさむい、十二月のはじめだった。

それから、ちようど三週間後の年のくれに、ぼくの弟が生まれてきた。ぼくはお兄ちゃんになった。

「おまえもお兄ちゃんになるんかあ。」

ひいじいちゃんが言ってくれた言葉を思い出した。ひいじいちゃんは、ぼくに弟ができるのを楽しみにしてくれていた。時代げきのコマーシャル中に、「お兄ちゃんがなればよ。」とよく言ってくれたのを思い出した。

そんな弟は、今年、ぼくがひいじいちゃんと過ごしたきおくのある年れいになった。ぼくの弟は、時代げきを見ているときには、おもちゃの刀を持って、「セイバイ」とまねをする。時代げきの歌はまだ歌えないけれど、ぼくが歌ったりすると弟も歌うまねをする。

ぼくの弟はひいじいちゃんを知らない。おぶつだんのところにある写しんや、動画でしか見たことがない。だけど、ぼくの弟は「ひいじいちゃん」と言って、おぶつだんの前にすわる。

そして今も、ぼくは弟といっしょに手を合わせる。

「ひいじいちゃん、ぼく、お兄ちゃんがんばっているよ。」